
声優回収寮

シオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声優回収寮

【Nコード】

N7084Z

【作者名】

シオ

【あらすじ】

自宅に戻ったら自宅が焼失？

嘘だろうか？冗談だよな？

呆然としていた健太郎の前に颯爽と現れたのは先日アニメの撮りで知り合ったばかりのちゆみだった。

「行くわよ」

行くなってどこへ？

わけもわからないまま連れていかれた先はアパレルショップで……？

声優×小説家、奇妙な同居生活始まりました。

1 録音ブースで君は興味なさにしていた (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

1 録音ブースで君は興味なさげにしていた

本を書いて売れる。この出版不況と言われる時代にそれが出来ることは、その部数もさることながら、たったそれだけでも凄いことだと言えるだろう。

ちゆみは録音ブースの中を見ながら次回作の構想を練りながら器用にも今晚の献立を考えていた。

先日から住人が増えたために、献立を考えるのも少し楽しい。

さて何がいいかと思いを巡らせていれば奇妙な話しではあるが、次回作の構想がほぼ固まった。

「ちよつとかわつた魔法使いの話とか、どうかな」

言いつつも胸元から取り出したメモ帳にペンを走らせていく手は止まらない。

ひとりごめいたその言葉に、いち早く反応したのは編集の一条だ。

「一条はちゆみの手元のメモを見ながらどんな話しなんですかと訊ねた。」

「一話二話とかの短い短編で話しが毎回完結する物語なんだけど、ただの一般人が主人公ね。この主人公が何かと言うと次元を越えてしまう……そんな話し」

「次元って言うとは……異世界ものですか？」

ありがちな話しかと一条が多少浮いた腰を元に戻すと、ちゆみはちよつと違つと視線だけはメモに落としながら片手を小さく左右に振って告げる。

「小さい頃とかにさ、たまーにあつたでしょ？時間を越えたり、場所を越えたり。ちよつと前まで居たのは駄菓子屋さんだったのに、気が付いたら目の前には数時間前に居た場所になつていたりとか。無かつた？」

それはとても不思議な体験だと思うのだが、ちゆみはいたって平然とそれを語る。

「小さい子だとたまに体重が軽いから浮くんじやないかつて思いこみでサイキック使えたりするじゃない。階段の上から飛んで見たらゆーっくり階段の下までふわふわ落ちていったりとか。つまりはそういう小さな不思議な世界を下敷きにする感じ」

まあありがちな話しよと言われてみて、逆に今度は一条がありがちなのだろうかと首を捻る番だった。

録音ブースに向かって指示を放ちながらも、音響監督である日野が話しを興味深そうに窺っているのが見えて、ちゆみはなんだか急に居心地が悪くなってきた。

こんなところで打ち合わせなんてするべきじゃないよなあと思いつつも、打ち合わせなんて段階でもないのでまた違うか、とも思いつつ、どうしたものかと呻く。

「なら、次元つて何を指すんですか？」

音響監督ではなくて、今度はアクターについてきていたマネージャーの一人が首を突っ込んできたようだ。ちゆみは益々話しを止める機会を失ってしまったようで、しどろもどろになりながらも口を開く。

「えっと……空間だったり、時間だったり。その時それぞれ変える感じ、かな。いつも気がつくと目の前の景色が変わっているような主人公で、仕事　もしくは学生でもいいかな？学生だとしたら帰りの道を真っ直ぐ走って寄り道をしなかったのに気がつくとも目の前は断崖絶壁の海があるの」

ちゆみがメモに書き殴りながら話しを続けていくと、気がつけばアクター達のマネージャーだらけになっていた。

周囲を囲む人垣に、ちゆみはなんだか圧迫感が酷いなと思いつつ続ける。こうなればもう自棄である。

あまり人前が好きではないのだがと思いつつもちゆみは考えついたらばかりの物語を語っていった。

「そこにはコンビニも何もなくて、灯りもない。だから最初本当にパニックになるんだけど、主人公は小さい頃からそういう突然の事態には慣れていたわけね。だから、そこまでパニックにならずにすんだの」

「あまりそれは……慣れたくないな……」

「まあ、そうかもね。少し自転車　もしくは車に乗っていて景色が変わったのでもいいか。運転していくとコンビニを見つけるの。そこで住所を聞いてびっくり。そこは二つも県を跨いだ場所にある、港町だった。けど、どんなに騒いでも仕方ない。移動させられたか移動したかしちやっただから、腹をくくるしかないって思っ、そこから……自転車の場合は列車が出る時刻を待つて、何とかして戻ろうとする。そして車だったら夜通し駆けて戻る　主人公はそんな毎日を送っていたの」

何とも壮絶な話である。

「なんか……大抵の場合って、魔法使いって最初に設定としてある

んなら、意のままに操れそうですね、移動先とか。まあ、ある程度の不自由さとか、魔法使いとしてそこまで力が強くないだとかで移動先が多少ずれる程度はありそうですが、そこまでの不自由さって、ただただ面倒そうなだけですけど」

一条がそう告げると、ちゆみはそこでくすりと笑う。

「不自由だから面白いんだよ　でね、そんな毎日だったんだけど、ある日やっぱりまた移動しちゃうんだよ。仕事してたりしたら、もしくは学校で授業中に……ぱっとね。すると目の前にあったのは過去の世界だった。ある日は異世界のお姫様が殺されそうになっていた。ある日は処刑上のだ真ん中に飛び出した　とか。毎回とんでもない話しに巻き込まれるようになって……少しづつ世界の理不尽さを正していく物語」

「……理不尽さ？」

「っそ。飛んだ先で……たとえばそうですね、人の命が塵一つよりも軽いものだとする。主人公は真っ直ぐな性格なんだと思う。だからそんなのおかしいって異を唱えるわけね。そしてその世界に波紋を投げかける。すると戻れた世界の中で、ちよつとした違和感を覚える様になるんだ。人がなんだか一人一人、優しく穏やかになっている、とか」

「あ……もしかしてですが、それは別の世界とされている世界と、何らかの形で主人公を介して？になるんですかね　繋がっている？」

音響監督が仕事をしながら話しに完璧に首を突っ込み始めたのを苦笑しながらちゆみは頷いた。

「主人公そのものが謎の塊で、世界は彼ないし、彼女を介して全て繋がっているの。だから主人公が世界はもつと優しくあるべきだ！

つて別の世界に対して理不尽さに対して異を唱えて、それを叶えるために動く。すると世界が主人公に屈した時、元の世界も屈するのね」

「……なんだか、最初はちょっと変わった魔法使いの話しとか言うので、もつと小さな話しかと思っていましたが……全然違いましたね」

一条が背もたれに疲れたようにどっしりと座りなおすと、未だ話しについていけない部分があると食いついて来る。どうやらめつきりと見せられてしまったようで、ちゆみの話しをもつと細かく聞きたい様子だ。

そしてそれはアクターについてきたマネージャー達も同様の様子で 困ったことにアニメの関係者達も同じようだった。

そして、どこに隠れていたのか、ちゆみの席の背後からひよっこりと顔を出した監督とプロデューサーがちゆみの前に首を出してきて、もつと詳しく話しが聞きたいんだけど、といった。

「あ、れ……西脇監督に小田プロデューサーまで……今日は来れなかったんじゃないあ……？」

すると監督とプロデューサーは挨拶だけはしに来ないと思ってきたのだと言う。どうやら大変忙しそうなか、こちらまで出向いてきたようである二人に、ちゆみは恐縮しきりである。まさかわざわざ自分に挨拶をしにくるためだけにここまで足を運ばせたのかと思うと、いつそ悪い気持ちにさえなるほどだ。

「いやいや、来て良かったよ！貴重な話し聞けたしね。……その話してもう連載確定なんですかね、一条さん」

「えっ？」

ちゆみは何を言っているのだとぼかんとしているが、監督 西脇も一条も真顔である。

なんとも冗談なような話しではあるが、西脇はこれを連載とほとんど同時進行でメディア化したらどうだろうかと言うのだ。

「嘘……いや、だってね？今作ったばかりの話ですよ！？面白いか面白くないかだって、市場の反応だって出てないのに！」

そもそも連載が確定しているわけではなくて、ただのネタ出しの段階である。面白いか面白くないか、大衆が判断するのは市場に出回ってから結論が下される物に対して、先にネタの段階でのメディア化を打ちだされてもむしろ困る よりも戸惑うばかりだ。

ちゆみは無茶苦茶だと言うが、今作である『君を求める僕の恋愛遺伝子』は増刷に次ぐ増刷である。

この本はハードカバー本として格調高い本に一見すると見えるため、どうにも手取りにくいものがあるが、その実読み口はとても軽やかで、存外読書離れが進んだ若い層ですらも手に取った。

お陰で今では文庫化、漫画化、朗読CD化、ドラマCD化 として現在、アニメ化のために第一話の音源を取りこんでいる最中だ。ドラマ化の話もきたらしいが、同じ映像化でもアニメ映像と実写映像とは全く違うため、ちゆみが一度断った背景があるのは秘めごとである。

物語の登場人物を演じる声優により、キャラクター達への息吹が吹き込まれていく。そんなある意味では不思議な場面を見せられてほろっとしていたかと思えば、急に現実的な考えを突きつけられたようにも思うこの一幕は、後に重大な事件となるのだった。

2 二次会に出向いた先はやっていなくて

声優さんって普段からこんななのか。

役者とは初めての付き合いであるため、どうにも勝手が分からない。

飲み屋で第一話の撮りが終わったため、打ち上げをしようと言うことで、西脇や小田に連れられやってきたのは少しこじやれた居酒屋である。

清潔感があり、最近の居酒屋はこういうのなんだなあとちゆみがつぶさに周囲を観察しているのを見て、主人公の友人役のアクターである林田健太郎が興味深そうに話しかけてきた。

「何見てるんすか？」

「んー……働いている人と、飲んでる人と……お店の中身」

心ここにあらずといった様子でぽつぽつと語るちゆみに、健太郎は何とも言いようのない手ごたえの無さを感じる。

俺と話してるんだよね？ 思わずそう言いたくなるが、相手はある意味雇い主とそう変わらないこの作品の生みの親である。

せめてこつちを見てくれればいいのと思うが、健太郎は適当に愛想を良くし、相槌を打つ。

「見て……何かに使えるんすか？そういうのって」

「まあ、そりゃね、使えるよ。次の話し、またメディア化みたいなんだけど……話しまだ書き始めてもないのに……嫌になるなあもろ。うんと、だからメディア化のそれなんだけど、……結局時々ぱーって飛んじやうわけじゃない？だとするとさ、飲んでた最中飛ぶ

こともあるはずなわけで……そうすると、じゃあ何を飲んでたとか、なんていうかなあ……社会人だった場合で今は考えてるけど、そういうパターンもありかなって見ながら考えてた」

ぶつぶつとメモを取りつつ周囲を観察している様子のちゆみにたいし、健太郎は一種不気味なものさえ感じていた。

一体こいつは何を言っているのだと当惑していれば、ちゆみは二つほど脇の一条の席まで突然這っていったかと思うと、学生のほうがおいしいね！！などとのたまう。

「わけわからん……」

健太郎としては作品の生みの親ともなると、これは仲良くしておくべきだろうと思いついて話しかけてみたわけなのだが、その歩み寄りは無駄に終わったようだ。

ちゆみは完全な自由人だ、そう確信した。

あれでは会話など成立しないに違いないと頷くと、適当な席に座り直す。

するとマネージャーである川治順平がすつと隣に座り、肩をぽんと一度叩くと、悪かったなと言うのだ。

「何すか？」

「いや、こつちの話しだから気にしないでよ。それよりおかわりいる？何飲む？」

「え……じゃあ、その、生」

+++

いい感じで全員が酔いがまわったところで、西脇がもう一軒行くとうと声高に叫ぶと、明日が早いと言う声優とそのマネージャーは申し訳ないがと二次会の席は断りを入れて帰宅した。

ちゆみは一条がまだ煮詰められるならばと言うため、この後も付き合うことに決めたらしい。

西脇と小田が行きつけの居酒屋があると言うことなのでそちらに全員で向かうことになった。

「……あいてない」

「今日定休日ですか？」

ついで早々に空ぶりになったわけなのだが、全員がもう「飲むぞー！」と勢い込んできたため、空ぶりに終わって相当悔しい思いをしていたらしい。

だが、時間も時間のために余所を探そうにも厳しいものがあつた。悔しいが今日はこれで解散かと西脇がしょげていると、順平が手元の手帳をめくって何やら考え込んでいる。

「じゅんぺー、もしかして明日の予定とか気にしてるの？」

「ああ、うん。明日のって言っても、俺のじゃなくて、皆のだけどね」

「ぶっくん？」

ちゆみが順平の手元を見つめていた手を、そのまま一条まで戻すと、なんならうちにきませんかと誘った。

「煮詰めるならうちでも出来るし。いつものなら用意出来るよ」

こちらはアルコールをほとんど入れていないからなのか、頭がしやんとしている二人のようで、ならそうしますかと一条とちゆみが

二人でこの面子から別れようとした時だ。順平が言うのだ。

「俺らも駄目？」

普通であれば何を戯言を、と言う状況かもしれない。

何せ大所帯である。

監督、プロデューサー、音響監督、音響スタッフ、宣伝スタッフ、声優数名、そしてそのマネージャーだ。十名を軽く超える面子が揃っているところでのこれであるため、あまりにも呆気なく申し出られたこれに対して西脇はあんどりと口をあけてしまった。

却下に決まっているだろうに、何を馬鹿なことかと思いい、声優たちも順平に対して「無茶つすよ」と冗談めかして言ってみるが、あまりにも洒落にならない。相手によつてはたつたそれだけで、関係が劣悪化するに決まっているだろうに、ほぼ初対面のような間柄で申し出ていいレベルを越えていた。

だが、ちゆみはこれに対し、考えることもなく間髪いれず言うのだ。

「いいよー。用意してないから、帰宅してから作るよっただけど、遅くなっても怒んないならー」

あつげらかんと言われた言葉にも啞然とするが、他の面子に対しての言葉遣いとあまりにも違い過ぎる順平との会話に使われる言葉づかいに、更に啞然とする。

「いや、……っつかこの人数だけど、ほんとにいいの？」

「うんー。だつてよく集まるし、今日は食材も余分にあるから作れるよ。お酒も皆くれるもんだから余ってるし、飲んでつてくれると助かる〜」

ちゆみはにこやかにそう言い放つと、思い出したように手をパンと叩き、いそいそと携帯を取り出すとどこかに電話をかけ始める。一体どこにかけ始めたのか、ほどなくして繋がった回線の向こう側からは、可愛らしい少女の声が聞こえてくる。

『ちゆみさーん！遅い！何やってるんですかぁ！』

「打ち上げてたから電話するの遅くなっちゃった。ごめんね」

『ぶーぶー！スーパー！いつてきてって言うからいつてきたのにい！無駄なのこれえ……』

しょんぼりとした声音がちゆみの耳朶を打つが、そんなことはないよと慌てて告げられたちゆみの言葉に、受話器の向こう側の少女の声は浮足立つ。

『あはっ！良かったぁ』

「それで、これから帰るから、もうちょっと一人だけど……大丈夫？」

『はい！大丈夫です！じゃ、待ってますね！』

「うん。じゃ……」

電話を終えるとちゆみは、食材の確保はオツケーみたいですよと告げて西脇と一条を両サイドに従えて、一路自宅へと向かった。

そんな中、よった頭で音響監督は考えていた。

さっきの声って、もしかして……

3 彼女の家から出てきた美少女？

ここが家だよとちゆみに指差されたほうを見てみれば、そこには門から決して近くはない所にある、最近建てたものと思しきデザイナーナース仕様であろう、大きな一軒家があった。

一人暮らしの女の住まいとして　というよりも、普通の一般家庭の家よりもそれはとても大きい。ゆったりとした大きさに、なんだか余裕を見せつけられたように思い、全員がうっと一瞬息をつめたように空気が重くなつたほどだった。

部屋数は聞いていないため分からないが、一応は都内に土地を所有した上、更にはそこに自宅を建ててあるのだから驚きである。

「借家でも何でもないので？」

そう恐る恐る訊ねる西脇に、ちゆみは土地も家もお金をためて買ったんだとさらりと告げる。それは嘘とは思えないほどに、言いまわしは軽く何気ない風に聞こえてなおのことうつつとつまつた。

「うつつわ、若くて土地持ち、更には家持ちとかって本気かよ……」

思わず健太郎がそう呟くと、脇で順平が家が欲しいならその分死ぬ気で頑張らないといけないけどねと苦笑している。

「死ぬ気でって……」

確かに声優という仕事で、それも東京都内でそれだけ稼ぐには相当頑張らなければならぬだろう。

芸能人である以上、人気物が言う部分大きい。そこを指して言っているのかと思っただが、順平の顔を窺うとどうやら違つよう

ある。どこか悲しげな瞳をしていてなんだか言葉に詰まってしまった。

ちゆみが玄関扉をあける前にしたことは、嚴重にも土地のセンサーをカードキーで一旦切つて土地の中に侵入し、そこから更に扉の前に行くと、携帯電話で中に居る先ほどの少女へと向けて一報を入れたのだ。

何とも念入りなとは思うのだが、ちゆみ曰く「最近物騒だから」だそうだが、年間でいくらかかっているのか、このだだっぴろい家を、と考えると想像するだけでも恐ろしい。

警備費用だけでもこの家の大きさに土地の広さからいって、相当かかっていることは想像に難くないからだ。

「都内で別に一等地つてわけじゃないが、セコムに入ってる上、これ……相当警戒しないとイケないつてのがちよつと辛いかもねえ」

金持ちつてのも大変そうだと嘯く大畑は、アニメの原画家である大畑が肩を竦めてちゆみに続いていくのを見ながら、順平がぼそりと言った。

「つけたのはそういう理由からじゃ、ないんだけどね……」

健太郎は何も言わず、順平についていった。

なんだか奇妙に感じるその言いまわしを深く勘ぐつてみたところ、順平はもしかするとちゆみと交際をしているのか、と思った。

そしてもしかしてここには通い慣れていて事情をよく聞き知っているからなのか、とも考えたが、まあいい。気になるなら聞けば良い話しなのだから。

とりあえず今のところはその考えは一旦脇に置いておくことにした。

「ちっゆみさん!!」

扉が勢いよくあいたかと思えば、飛び出してきたのは可愛らしい少女。ではなく、二十代前半。ないし、後半はいつてそうには見えない、妙齡の女性の姿だった。

がばりとちゆみの首に飛びつく勢いで飛び出してきた女性に、ちゆみは、よくできましたとばかりに頭を優しく撫でてやる。

まるで飼い主と犬のような間柄を彷彿とさせるそのやりとりは、呆気にとられていた西脇は、女性の顔ではなく、声を聞いて思い出す。

「鈴宮……お前、こんなところで何をしてる?」

なんでこんなところから出てくると言われて鈴宮千枝はようやく西脇達の姿に気づいたようだ。

「……つれ?なんでこんなところに西脇さんがいるんですか?」

首をかくんと傾げて子供じみた動きで千枝はおかしいなあと言う。

二人はタイムラグがあるものの、全く同じことを考えたようだった。

「そりゃこっちの台詞だったの」

+++

リビングに落ち着いた面々は、早速くだらない話で盛り上がって
り始めているようだ。

それを見ながら千枝は料理をテーブルに並べつつ、皆お酒飲み過
ぎですよと眉根を顰めて言う。

実際に千枝が眉を顰めて言うほどに、それはそれは飲み過ぎと分
かるほどに彼らは全員酒臭かった。

「いやあ……久しぶりの面子が多くてさ？」

元から今日集まった面子は、声優に限って言うなれば元は同じく
らしいデビューだったため、近しい者達の集まり程度には気軽な間
柄ではあったのだ。

お互いデビューしたての頃はマネージャーもつかないような下っ
端だったが、今や押しも押されぬ人気声優である。そのためこの作
品での初撮りともなると、マネージャーも気合が入っているのか、
全員参加だ。

互いの過去を知っているだけに大いに盛り上がったのだと千枝に
口ぐちに言う声優たちに、成る程と納得した様子で頷いた。

千枝は最近流行りのアイドル声優と言うやつだ。歌って踊ってラ
イブも開く、そんなアイドル声優とも言っただけに、顔は可愛らしく
整っている。一見すれば入社したての可愛らしいOLかぴちびちの
大学生で通りそうだが、実際はこの業界に入って三年目の若手声優
だ。

声も十代のような可愛らしい声で、下手をすれば小学生と言って
電話をかければ、相手はそれを信じ込んでしまうほどの声の持ち主
だった。

事実、勧誘の電話に小学生のふりをして断ったことがあると以前
笑いながら言っていたのを順平は思い出した。

そんな千枝の可愛らしい声に健太郎はそれでお前は何でここに居
るんだと訊ねた。

自分達は監督たちと飲み会としても、千枝はこの家に何故居るのか、なんだか妙に気になって突っ込んで話しを聞きたくなった。

「ええ？あー……えつとお……」

けれど千枝は答えにくいのか、言葉を濁して足を一步引いて、二歩引いて　気がつけば変態！と罵られて逃げられてしまっていた。

「何で変態なんだよ！」

流石にただ問い詰めただけでその言い草は無いだろうと思ったが、千枝はちゆみのいるキッチンまで下がるとそこから舌を出して更に口汚くのしり始めたのだ。

「いーっだ！変態変態！乙女の事情に首を突っ込むなんて、変態じゃないですかあ！もう、林田さんったらやらしい！さいってえ！」
「はああ！？」

突然のこのやり取りに対して、今度は健太郎が話しの的になった。

「なになに？健太郎何したの？千枝ちゃんいじめたの？」

西脇に小田にと声優たちの酒盛りの間に割ってきたかと思うとにやにやと嘲笑うように言うのだ。

「おいおいおい、ちえりんいじめたらお前やばいよ？明日あたりブログ炎上よ？分かってるの？死にたいの？闇討ちされるよ？」

勿論それは鈴宮千枝のファンである方々に、だ。

「鈴宮さんの人気って言ったら今きてますからねえ。ほんつと、やばいんじゃないですかあーん？」

お前オタクの怖さ分かってるのかと自らもオタクを公言してはばからない西脇がからからと笑いながら言う。完全に出来あがっているようで、西脇は笑い上戸が止まらないようだ。酒瓶を掴んだままに笑っている。

よく見ればそれはくどき上手、命と書かれた日本酒だった。

日本酒を今瓶で飲んでいるが、先ほどまでの居酒屋では焼酎、ビール、日本酒も瓶であけていたことを思い出す。

あんた絶対飲み過ぎだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7084z/>

声優回収寮

2011年12月24日12時53分発行